

平成 21 年度

改善報告書

大学名称 東京理科大学 (評価申請年度 平成 20 年度)

勧告について

No.	種別	内 容																																																																																																																											
1	基準項目	学生の受け入れ																																																																																																																											
	指摘事項	1) 過去 5 年の入学定員に対する入学者数比率の平均が、理学部第一部では 1.25 と高いので、是正されたい。 2) 収容定員に対する在籍学生数比率が、理学部第一部では 1.29、工学部第一部では 1.28、基礎工学部では 1.28 と高いので、それぞれ是正されたい。																																																																																																																											
	評価当時の状況	<p>1) 入学者数比率 (過去 5 年) の平均</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成 15 年度</th> <th>平成 16 年度</th> <th>平成 17 年度</th> <th>平成 18 年度</th> <th>平成 19 年度</th> <th>平均</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>理学部第一部</td> <td>1.25</td> <td>1.18</td> <td>1.18</td> <td>1.16</td> <td>1.48</td> <td>1.25</td> </tr> </tbody> </table> <p>2) 在籍学生数比率 (平成 19 年 5 月 1 日現在)</p> <p>理学部第一部 ※留年生は内数</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">収容定員</th> <th colspan="2">1 年次</th> <th colspan="2">2 年次</th> <th colspan="2">3 年次</th> <th colspan="2">4 年次</th> <th rowspan="2">合計</th> <th rowspan="2">比率</th> </tr> <tr> <th>学生数</th> <th>留年</th> <th>学生数</th> <th>留年</th> <th>学生数</th> <th>留年</th> <th>学生数</th> <th>留年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>19 年度</td> <td>2,430</td> <td>980</td> <td>90</td> <td>673</td> <td>0</td> <td>671</td> <td>0</td> <td>819</td> <td>156</td> <td>3,143</td> <td>1.29</td> </tr> </tbody> </table> <p>工学部第一部 ※留年生は内数</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">収容定員</th> <th colspan="2">1 年次</th> <th colspan="2">2 年次</th> <th colspan="2">3 年次</th> <th colspan="2">4 年次</th> <th rowspan="2">合計</th> <th rowspan="2">比率</th> </tr> <tr> <th>学生数</th> <th>留年</th> <th>学生数</th> <th>留年</th> <th>学生数</th> <th>留年</th> <th>学生数</th> <th>留年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>19 年度</td> <td>1,625</td> <td>614</td> <td>48</td> <td>470</td> <td>0</td> <td>433</td> <td>0</td> <td>561</td> <td>79</td> <td>2,078</td> <td>1.28</td> </tr> </tbody> </table> <p>基礎工学部 ※留年生は内数</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2"></th> <th rowspan="2">収容定員</th> <th colspan="2">1 年次</th> <th colspan="2">2 年次</th> <th colspan="2">3 年次</th> <th colspan="2">4 年次</th> <th rowspan="2">合計</th> <th rowspan="2">比率</th> </tr> <tr> <th>学生数</th> <th>留年</th> <th>学生数</th> <th>留年</th> <th>学生数</th> <th>留年</th> <th>学生数</th> <th>留年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>19 年度</td> <td>960</td> <td>282</td> <td>0</td> <td>340</td> <td>26</td> <td>275</td> <td>0</td> <td>328</td> <td>27</td> <td>1,225</td> <td>1.28</td> </tr> </tbody> </table> <p>評価後の改善状況</p> <p>1) 入学者数比率 (過去 5 年) の平均</p> <p>入学定員の遵守は充実した教育のためには重要であるが、現実的には入学者を選抜する際の合格者の歩留りにより定員管理は不確定要素が強い。しかし本学では、厳密に歩留りを精査するとともに、教育環境・財政の健全性とのバランスをも考慮し、入学者の確保数については入学定員の 1.2 倍を超えないよう努めることとしている。</p> <p>平成 21 年度入試では、理学部第一部は特に厳密に歩留りを精査した結果、入学者数比率は 1.12 倍となり単年度では抑えられた。なお、前年度までの入学者数比率が高かったため、結果として評価当時と同様 5 年間の平均では 1.25 倍となった。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成 17 年度</th> <th>平成 18 年度</th> <th>平成 19 年度</th> <th>平成 20 年度</th> <th>平成 21 年度</th> <th>平均</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>理学部第一部</td> <td>1.18</td> <td>1.16</td> <td>1.48</td> <td>1.29</td> <td>1.12</td> <td>1.25</td> </tr> </tbody> </table>		平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平均	理学部第一部	1.25	1.18	1.18	1.16	1.48	1.25		収容定員	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		合計	比率	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	19 年度	2,430	980	90	673	0	671	0	819	156	3,143	1.29		収容定員	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		合計	比率	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	19 年度	1,625	614	48	470	0	433	0	561	79	2,078	1.28		収容定員	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		合計	比率	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	19 年度	960	282	0	340	26	275	0	328	27	1,225	1.28		平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平均	理学部第一部	1.18	1.16	1.48	1.29	1.12
	平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平均																																																																																																																							
理学部第一部	1.25	1.18	1.18	1.16	1.48	1.25																																																																																																																							
	収容定員	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		合計	比率																																																																																																																		
		学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年																																																																																																																				
19 年度	2,430	980	90	673	0	671	0	819	156	3,143	1.29																																																																																																																		
	収容定員	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		合計	比率																																																																																																																		
		学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年																																																																																																																				
19 年度	1,625	614	48	470	0	433	0	561	79	2,078	1.28																																																																																																																		
	収容定員	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		合計	比率																																																																																																																		
		学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年																																																																																																																				
19 年度	960	282	0	340	26	275	0	328	27	1,225	1.28																																																																																																																		
	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平均																																																																																																																							
理学部第一部	1.18	1.16	1.48	1.29	1.12	1.25																																																																																																																							

評価後の改善状況

[改善計画]

現在の状況を単年度で改善することは困難なため、平成 22 年度入試から入学者数を、当面入学定員の 1.15 倍程度に抑えるよう、学科間の調整を含めて歩留りの精査に努め、年次計画により順次入学者の抑制を図るものとする。

	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平均
理学部第一部	1.16	1.48	1.29	1.12	1.15	1.24

	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平均
理学部第一部	1.48	1.29	1.12	1.15	1.15	1.24

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平均
理学部第一部	1.29	1.12	1.15	1.15	1.15	1.17

2) 在籍学生数比率

平成 21 年度においては入学者を抑制したことにより、平成 20 年度との比較においては、理学部第一部、工学部第一部、基礎工学部とも比率が低下し、改善が図られた。

理学部第一部

※留年者数は内数

	収容定員	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		合計	比率
		学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年		
20 年度	2,400	884	112	822	0	666	0	791	125	3,163	1.32
21 年度	2,400	769	96	741	0	820	0	780	117	3,110	1.30

工学部第一部

※留年者数は内数

	収容定員	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		合計	比率
		学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年		
20 年度	1,650	529	35	556	0	475	0	527	102	2,087	1.26
21 年度	1,700	508	37	468	0	557	0	544	75	2,077	1.22

基礎工学部

※留年者数は内数

	収容定員	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		合計	比率
		学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年		
20 年度	1,020	401	0	327	49	288	0	302	27	1,318	1.29
21 年度	1,080	295	0	439	41	283	0	307	19	1,324	1.23

[改善計画]

各学部における在籍学生数比率は、平成 22 年度以降入学者を抑制することにより、段階的に下げるものとする。平成 24 年度までには各学部で在籍学生数比率が 1.20 倍を超えないよう、年次計画により順次抑制を図るものとする。

評価後の改善状況	理学部第一部 ※留年者数は内数											
		収容定員	1年次		2年次		3年次		4年次		合計	比率
			学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年		
	22年度	2,400	791	101	639	0	741	0	919	99	3,090	1.29
	23年度	2,400	794	104	656	0	639	0	864	123	2,953	1.23
	24年度	2,400	794	104	656	0	656	0	750	111	2,868	1.19
	工学部第一部 ※留年者数は内数											
		収容定員	1年次		2年次		3年次		4年次		合計	比率
			学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年		
	22年度	1,750	515	38	447	0	468	0	632	75	2,062	1.18
基礎工学部 ※留年者数は内数												
	収容定員	1年次		2年次		3年次		4年次		合計	比率	
		学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年	学生数	留年			
22年度	1,140	315	0	329	40	398	0	295	12	1,337	1.17	
(注記：学生数・留年数の人数は、過去の比率を参考に算出した予測値である。)												
改善状況を示す具体的な根拠・データ等 別紙1 大学基礎データ (2009.5.1) 表13 (抜粋) 別紙2 大学基礎データ (2008.5.1, 2009.5.1) 表14												
<大学基準協会使用欄>												
検討所見												
改善状況に対する評価						1	2	3	4	5		

No.	種 別	内 容
2	基準項目	施設・設備
	指摘事項	<p>神楽坂キャンパスでは、キャンパス再構築計画が遅延しており、現状の改善策や新キャンパス構想も検討されているが、校舎の一部は閉鎖されたままであり、教育・研究活動が保証されている状況とは言えない。特に、学生の教育研究活動への支障が図書館、研究室、講義棟に深刻に現れているので、適切なキャンパス再構築計画を早急に策定し実現されたい。</p>
	評価当時の状況	<p>神楽坂キャンパスの問題点である施設の狭隘については、神楽坂キャンパス再構築計画により、既存の 2,3,7,8,9 号館を解体して新校舎（新 2 号館）を建設し、施設の狭隘問題を解消することを見込んでいた。又、図書館が建物中階に位置していることによる安全性利便性の問題についても、新 2 号館内の低層部分に新図書館を設ける予定でいた。このため、既存校舎（2,3,7,8,9 号館）は、再構築計画の進捗によりすぐに解体工事に着手できるよう、使用せずにはいた。</p>
	評価後の改善状況	<p>（１）新キャンパスの開設について</p> <p>本学は、神楽坂キャンパスにおける教育研究スペースの狭隘問題等の解消のために、新たな校地を取得する新キャンパス計画を策定した。</p> <p>平成 21 年 3 月 26 日、葛飾区と土地譲渡契約を締結し、葛飾区新宿六丁目に約 30,000 m²の土地を取得した。名称は葛飾キャンパスとし、平成 24 年度開学を目指す。</p> <p>葛飾キャンパスに神楽坂キャンパス機能の一部を移転させることにより、最も深刻な問題とされていた施設の狭隘問題、校地面積の不足問題について、大幅に改善できることになる。</p> <p>現在、都市計画手続き業務、建築設計・監理業務を委託し、キャンパス新築計画に着手している。新キャンパスの利用計画の詳細については、現在学内で検討中である。</p>

		<p>(2) 閉鎖中の校舎の再利用について 神楽坂キャンパスについては、新 2 号館建設の早期着工が困難なため、既存の建物 (2,3,7,9 号館) を改修し、暫くの間、教室及び研究室として使用する。</p> <p>校舎改修に先立ち、平成 20 年度に各建物について耐震診断を行い、現在、3 号館改修工事を実施している。竣工は平成 21 年 9 月の予定で、後期授業より教室使用を開始する。</p> <p>【3 号館改修内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○耐震補強工事 ○教室の整備 (14 教室 1,232 席) <ul style="list-style-type: none"> ・1 号館 13 階の教室 (1 室 144 席) 及びゼミ室 (7 室 252 席) の 3 号館への移設 (建物の中層階の教室とゼミ室移設により、学生移動の利便性向上等の改善) ・再利用の 3 号館 2～5 階の 4 フロアに、計 14 教室 1,232 席を設置 (前記の 1 号館移設分を差し引いても 6 教室 836 席分の教室スペースが増加) ・同 3 号館 5～8 階部分には、九段校舎の工学部 (第一部及び第二部) 経営工学科を移転する。 (九段校舎に生じる空きスペースを図書閲覧と教育研究スペースに充当し、九段校舎の狭隘問題の改善を図る。) <p>2,7,9 号館については、平成 21 年 8 月より改修工事に着手する。</p> <p>(3) 大学会館の建設について 本学の教育研究及び福利厚生スペースとして活用するために、大学会館の建設を予定している。平成 21 年 7 月に建築確認申請書類を提出し、建設予定地内にある既存建物の解体工事に着手する予定である。</p>			
改善状況を示す具体的な根拠・データ等 (2) 閉鎖中の校舎の再利用について 別紙 3 3 号館改修図面 (3) 大学会館の建設について 別紙 4 大学会館平面図					
<大学基準協会使用欄>					
検討所見					
改善状況に対する評定	1	2	3	4	5

No.	種 別	内 容
3	基準項目	点検・評価
	指摘事項	<p>重大な問題が相当数あるにもかかわらず、大学として、組織・活動について不断に点検・評価がなされていないのみならず、その必要性について適切に認識もされていない。さらに、提出された『点検・評価報告書』『大学基礎データ』にも重大な不備が複数認められる。自己点検・評価の姿勢・体制・方法に欠陥があり、この点で大学として基礎的要件を満たしていないので、是正されたい。</p>
	評価当時の状況	<p>評価当時における本学の自己点検・評価に係る取組み状況は次のとおりである。</p> <p>(1) 本学ではこれまで大学として外部評価を受けた経験が著しく乏しい(1963年に大学基準協会の加盟判定審査を受けて以降、大学として相互評価などの第三者評価を受けていない)ことから、自己点検・評価に対する取組み姿勢や方法等が成熟しておらず、大学全体及び各部局におけるPDCAサイクルも適切に機能していなかった。</p> <p>(2) 自己点検・評価活動において実効性を考慮した組織体制が確立しておらず、その結果、各組織間の連携や情報の共有化について不十分であった。</p>
	評価後の改善状況	<p>評価結果を踏まえて、当初の取組みとして次の点について現在具体化に向けて検討を進めているところである。</p> <p>(1) 委員会組織及び事務局の一本化</p> <p>責任・権限の明確化及び意思決定の迅速化等を図るため、これまで法人・大学それぞれに設置していた自己点検・評価に係る委員会組織を一本化し、理事長及び学長の下に全学的な委員会組織(大学評価委員会/仮称)を設置する。当該委員会の主な役割は、自己点検・評価に係る全学的な方針を策定すること、自己点検・評価活動を推進すること、及び自己点検・評価に基づく改善の監理を行うなどPDCAサイクルを円滑に機能させる権限と責任を持つことにある。</p> <p>また、これに伴い、自己点検・評価に係る業務を統括する部署(大学評価室/仮称)を新設する。当該部署では、全学の自己点検・評価に係るデータの集積・管理を行い、それをもとに評価指標の設定等を行うほか、自己点検・評価活動の主管事務局として、様々な業務に主導的に取り組む。</p>

		<p>(2) 自己点検・評価活動と教育開発センター活動との連携強化</p> <p>各学部・研究科が実施する自己点検・評価活動については、部局間でその取組み姿勢や方法等に差が生じやすいため、これらの調整機能を有する組織を置くことが重要である。特に、教育に係る自己点検・評価活動とFD活動は密接に関わりを持つため、FD活動の啓発・支援を所掌する教育開発センターが自己点検・評価活動に係る各部局間の調整機能を果たすよう位置付ける。</p>
<p>改善状況を示す具体的な根拠・データ等</p> <p>別紙 5 自己点検・評価に係る組織体制の改善について</p> <p>別紙 6 自己点検・評価に係る組織体制図</p> <p>別紙 7 大学評価委員会（仮称）の構成員及び役割について</p>		
<p><大学基準協会使用欄></p>		
	<p>検討所見</p>	
	<p>改善状況に対する評定</p>	<p>1 2 3 4 5</p>

〈 改善報告書検討結果（東京理科大学） 〉

[1] 概評

2008（平成20）年度の本協会による大学評価に際し、「学生の受け入れ」「施設・設備」「点検・評価」に関する勧告の改善報告を求め、本年度「改善報告書」が提出された。

それによると、学生の受け入れについて、理学部第一部では、入学定員に対する入学者数比率を1.20以下に抑えるという数値目標を据え、2009（平成21）年度には入学者数比率が1.12となった。同年度における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均は1.25、収容定員に対する在籍学生数比率は1.30と数値上の変化は見られないが、計画が順調に進めば、2012（平成24）年度には両比率とも適正な数値に改善される見込みとなっている。計画が達成されるよう今後も適切な定員管理の努力を継続されたい。また、工学部第一部および基礎工学部における2009年（平成21）年度の収容定員に対する在籍学生数比率はそれぞれ1.22、1.23と前年度の1.26、1.29に比して改善が見られるものの、適正な水準とはいいがたいので、今後とも定員管理に注意を払う必要がある。

神楽坂キャンパスの施設問題については、2009（平成21）年3月に東京都葛飾区と土地譲渡契約を締結し、校地予定地として30,000㎡の土地を取得した。2012（平成24）年度の開設を目指してキャンパス新築計画に着手している。新キャンパスの開設が円滑に進むよう早期に計画をまとめ、実行に移されたい。

また、神楽坂キャンパスの新2号館建設の早期着工が困難なため、閉鎖中の校舎を改修し、しばらくの間、教室および研究室として利用することとした。一部の校舎は2009（平成21）年度後期より利用が始まり、その他の建物も同年8月より改修工事に着手している。さらに教育・研究および福利厚生スペースとして大学会館の建設を進めることが決まっている。

一方、点検・評価については、委員会組織と担当事務局を一本化し、方針の決定、データの収集・管理を一元的に行うこと、自己点検・評価活動と大学のファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を担う教育開発センターとの連携を強化することを軸に検討を始めている段階であり、今後の展開を注視する必要がある。できるだけ早期に結論を出し、実質のある自己点検・評価活動を行えるような体制の整備に努められたい。

[2] 今後の改善経過について再度報告を求める事項

- 1 2009（平成21）年度における理工学部第一部の「学生の受け入れ」について再度報告されたい。
- 2 「施設・設備」について、葛飾キャンパス新築計画および神楽坂キャンパスの再構築計画の進捗状況について再度報告されたい。
- 3 「点検・評価」について、自己点検・評価活動の実質化に向けた取り組みの進

捗状況について再度報告されたい。

なお、本事項については、次回大学評価申請時まで毎年度改善報告を求めるものとする。